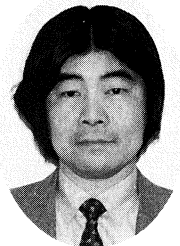


本部片平丁の元図書館（現在、東北大記念資料室）。  
最近片平キャンパスの古い建物に市民の関心が高い。

# 會 報

東北大学法学部同窓会

第 25 号  
 発 行 所  
 東北大学法学部同窓会  
 発 行 日  
 平成10年6月20日  
 印 刷 所  
 今野出版企画株式会社



川内だより

会 長 大 西 仁

四月一日より柳父圀近前学部長の後を継いで法学部長となりましたので、自動的に同窓会長の役目もお引き受け致すことになりました。どうぞよろしくお願い致します。

三月末を以て、比較政治制度論の出岡直也助教授がご退任になり、慶応義塾大学法学部にお移りになりました。

一方、昨年十月には、国際私法講座に西谷祐子助教授が着任され、さらに本年四月には、早川眞一郎教授と水野紀子教授を、ともに民法講座にお迎え致しました。

これで教授会メンバーは三十二人になりましたが、一昨年には商法の吉原和志教授が大隅健一郎賞を受賞され、昨年には社会法の水町勇一郎助教授が日本労働研究機構労働関係図書優秀賞を受賞されたのはじめ、メンバーそれぞれがかなり充実した研究成果を挙げつつあります。

この他、各学会の会長・役員、学術会議の各研究連絡委員会委員など、全国的学会のリーダーとして活躍しているメンバーも多く、又、司法試験委員、各種審議会委員、公益委員、医療機関の倫理委員会委員、さらには、行政法の藤田宙靖教授が行革会議委員をお勤めになるなど、近年は、社会的貢献も目立つようになって居ります。

こうして見て参りますと、三十二人のメンバーというのは、全国の大学の法学部の中で、規模はさほど大きいものではありませんが、質的には一、二を争う水準に達していると言えるのではないかと自負致して居ります。

学内では、西洋法制史の小山貞夫教授が、三月末に総長特別補佐職を退かれ、ひき続き四月からは新設の副総長のご重責を担っていらっしゃいます。又、商法の関俊彦教授は、三月末を以て学生部長のご大任を無事終えられました。

学生に目を転じますと、全国各地から入学者が集まり、仙台で法学部学生として四年間（ないしはそれ以上）を過ごした後、就職してまた全国各地に散っていくという、国立大学にふさわしい伝統は今なお健在です。又、在学中に、世の中の変化にすばやく対応してあれこれと手がけるというよりは、一つの物事にじっくりと正面から取り組む学生が多いという伝統的気質も、これまた健在で、頼もしい気が致して居ります。

最近の厳しい経済状況下にあつて、学生諸君は就職活動にだいぶ苦労して居りますが、それでも他大学の法学部の学生に比べると、多くの者が志望したところに就職できているようです。これには、各界でご活躍の先輩方に引張って頂けるとか、そもそも一学年の人数が少ないので競争には有利であるというような条件も働いているのでしようが、今申しした、物事に正面から取り組むという姿勢が社会からも好感を以て受け止められているという面もあるのではないのでしょうか。

現在、「大学改革」・「大学院改革」の大波は全国の大学をおおいつくした観があり、東北大学の各学部も熱心に「改革」に取り組んで居ります。社会が変化するのに応じて大学も亦改革を進める必要があることは申すまでもありませんが、近年はややもすると、大学は今後いかなる研究・教育を行うべきかという議論が十分になされなまま、性急に「大学改革」が進められている傾向もあります。そのような中で、わが法学部は、よき伝統をいかしながら、五十年後・百年後を見据えた改革を進めなければならぬと自戒致して居ります。

おそらく、近々、同窓会の皆様にも、東北大学法学部がめざす将来の姿を提示できるのではないかと思ひます。その時には、是非、これまでもまして、ご教示・ご支援を賜りますようお願い致します。

## 《同窓先輩インタビュー》

### 衆議院議長 伊藤宗一郎氏に聞く

インタビュー

法学部教授

吉田正志

事務局長

小野寺健三郎

——本日は、衆議院議長として

ご多忙の毎日であられる伊藤先輩

に、同窓会会報掲載のためのインタビューの時間をお取りいただき、まことにありがとうございます。まず、衆議院議長にご就任なされたときのご感想をお聞かせ下さい。

『私は27代目の衆議院議長となりますが、東北・北海道出身議員で衆議院議長となったのは私がおはじめてでして感慨無量でした。自民党が必ずしも単独過半数を維持していたわけではない状況の中で、しかも今回は自民党から共産党まで全員私を支持してくれました、私はとくに名のある政治家だとは思っていませんが、みている人はちゃんとみてくれているんですね。

政治を越えた人間の触れ合いというか、信頼関係というか、昭和35年の初当選以来37年間コソコソと歩いて来た長い間の積み重ね、このことをみてもらっていたのだなと、重責を担う緊張感とともに、人間伊藤宗一郎をみてくれていたのだなと、その感動が強かったですね。

自分は無党派に近い政治生活できて、バックもないだけに感動も強かったのですが、私の名前で各党に当たった村岡さん（当時、自民党国対委員長）の言うのには、各党ともノーと言ったところはな

い、二つ返事でいいという話で、満票入るよということでした。なんでそんなに各党が認めてくれたのかと聞いたら、37年間ロッキードとかリクルートとかのスキャンダルに一回も入っていない、その政治家としての信頼が高かったとのことでした。それでコソコソ歩いて来て頂点を極められた、ここは自負してもいいと思つて居るところです。』

——政治家を志されたのは、どんなところからでしょうか。

『時代が私という人間を作つたと言つても過言でないと思ひます。私は昭和5年に小学校に入りましたが、昭和恐慌の時期でした。私は中新田の田舎の寒村で生まれて、子供心にさみしい村の姿が焼き付いています。

また、昼の弁当を持ってこれられない子もいて、今朝いっばい食べてきたと言つてヤセ我慢をしたり、校庭の水呑み場で水を呑んでしのいだりといった状態でした。家が貧しいために、同級生の家に子守に行った子も何人か見えています。同じ同級生なのに、片一方は学校に行き、片一方は子守で、こういうことがあつていいのかと、子供心に思つていましたね。

小学校を終えたらすぐに北海道

の炭鉱に行った同級生もいます。まだ政治という観念はなかったけれど、「同級生なのに」という憐憫の情を、生意気のようにですが、強くもちました。こうした体験が政治家を志したものでしょうね。」

——高校・大学時代はいかがでした。  
『私は、昭和16年に第二高等学校に入りましたが、その12月8日に大東亜戦争が始まって、学校は軍事訓練・体力万能といった状態でした。在学期間は二年半に短縮されて、18年9月に卒業させられました。』

18年10月に東北大学に入ったのですが、戦争一色で学業も出来ず、勤労奉仕・軍事訓練ばかりで、その出欠はうるさかったものです。徴兵猶予がなくなり、また徴兵年齢が19歳になったので、兵隊に行くためだけの時間しかなかったわけです。それに、兵隊に行けば必ず死ぬと思っていました。遺書も書いて、それは今でも持っていますよ。このころは、兵隊に行くための準備を毎日していたと言っていますね。

戦争では何人かの同級生、それも優秀な人ほど死んでいます。特攻隊に志願したのは本当に純粋な人だったからでしょうかね。特攻

隊の遺書は日本のバイブルにしてほしくらいです。戦争というのは、こんな素晴らしい人間を奪っていくのか、これだけは許せない、こういう思いの毎日でした。戦争というものは絶対に避けなければならぬ。そのためには政治の世帯に入らなくて戦争をなくさなくてはならない。こんな思いを抱いて大学の残りの2年を過ごしました。

大学では、清宮・中川・木村・広浜などの諸先生がおられました。兵隊から帰ってきたら、津曲先生の労働法、新明先生の社会学、それに国文学やヨーロッパ政治史などの講義しかなく、これらを聴いて、22年9月に卒業しました。』

——それから政治家としての道を進まれるわけですが。

『私は、政治家になる下地を自分で作らなければならなかったのだ、それには新聞記者になるのがよいと思って、読売新聞に入ったわけです。そこから一直線に政治家への道を進んだのですが、まず政策を勉強しなくてはいけないと思ひ、あえて花形の政党担当でなく農林省担当を希望しました。ここで河野一郎氏に出会い、これが政治家になる基盤となりました。』

当時は吉田茂氏が全盛で、これに鳩山・河野が立ち向かうという

状態でした。鳩山・河野が勢力を増すためには、新しく代議士を作るしかない。それに私が選ばれて、鳩山・河野派の代議士になれという事になったわけです。宮城でも愛知氏支持でなければ人でないという状態で、県連にも入れないくらいだったのですが、とにかくこうした中で初当選しました。

そうした中で河野さんが急逝して、河野派は雲散霧消したようなもので、しばらくは一人でやっています。記者時代から親しかった石田博英さんから三木武夫氏の

ところへ一緒に言われたいところへ、三木さんもおかげで今の自分があると思ひます。』

——近年、官僚の不祥事が問題になっていますが、いかがお思ひですか。

『私が衆議院議長になれた大きな要因の一つはやはり当選回数で、ふるさとの人々にはただただ感謝するしかありません。宮城県のものも片田舎で生まれたからこそ、議長になれたと思っています。』

ところが、最高学府出身でありながら、不祥事を起こしている者がいる。彼らはふるさとをもっていないのではないか。日本人の根本には恥があります。恥を知れと、恥ずかしいことをするとか。私にもいろんな誘惑がそれなりにあったが、こういうことをして名が新聞に出たら、とてもふるさとに帰れないと思ひました。母は早くに亡くなっていましたが、その母の涙を誘うようなことは出来ないと思ひました。この基本はふるさとですよ。

それが、いまは最高学府を出た者が恥知らずなことをしている。それはふるさとをもたないからですよ。ふるさとを大事にしてい



和やかにインタビューを受けられる、伊藤宗一郎氏。右側は吉田正志教授。

ことを教育にも生かしていったほうがいいと思いますね。

最近の教育は、例えば学校でタマを投げてガラスを割っても、生徒はまず家へ帰って金を持ってくる、ただ弁償すればいいというだけで済ますことがある。私どものころは、まずお詫びをするのが最初で、場合によっては罰として廊下に立たせられたものです。すべて金と物で解決すればいいというのは間違いだ。つまらないことのようにだが、人の物は大事にすると、キメの細かい教育がほしい。

それから、教育ということでは、妊娠中絶の問題がある。優生保護法ができて中絶が合法となつて、戦後届け出た数が三千五百万にもなる。ヤミでの中絶を加えれば、この倍くらいはあるらしい。こんなに多くの命が亡くなっている。この命の尊さ、これに何も思わないとしたら、これも根本は教育でしよう。不況だ、物が売れない、少子化のせいだ、などといっているが、基本をおろそかにしていないか。本末転倒でないでしょうか。もちろん、中絶にはいろいろ事情もあるでしょう。一概には言えないけれど、子供が多くて困るといふのは、一つは教育費の問題だろうから、教育面の配慮は必要で

す。それから住宅です。二世・三世代入る住宅を作るときには援助をするとかが必要で、国がほおかむりして生めと言つても無理ですよ。私のライフ・ワークとして、この問題を取り上げたいと思つていきます。』

——予定の時間も残り少なくなりました。最後に今後の抱負をおきかせ下さい。

『来日する外国の要人は、必ず議長長の所に来られるのですが、国の代表と代表とが話し合つていくことが世界平和の基になると思つて、外務省ではできない議長外交に精励しています。』

外国の要人と精一杯話し合つて平和を考えていきたいと思つますが、そんなときいつも、私は日本のハイデルベルクと呼ばれる仙台で育つた者で、いまいろいろ問題を起こしている大学の出身者ではないといふんです。仙台は魯迅をはじめ外国人留学生を大事にする所で、学生と市民がこんなに一体

になつてゐる所はないと思つますね。市民が東北大学を見る目はとも温かでした。

これからの東北大学も変に象牙の塔ぶらないで、この雰囲気是非とも残してほしいと思つます。東北大学出身者はみな東北大学を誇りに思つてゐるのではないでしょう。自分の出身校にこんな愛着をもてる大学は、他にないのではないのでしょうか。』

——長時間にわたり貴重なお話をお聴かせいただき、本当にありがとうございました。伊藤先輩が、国権の最高機関たる国会において衆議院議長に選任されたことを、我々同窓生一同この上ない誇りに思つておりました。先輩の今後のますますのご活躍をお祈り申し上げます。

以上  
※このインタビュウは、平成10年3月22日夕、仙台国際ホテルの一室にて行い、その要旨を事務局がまとめ、ここに掲載した。

## 日章旗の寄せ書き

木佐英男

昭和十八年頃には負け戦の雰囲気が強まっていた。兵役を逃れて

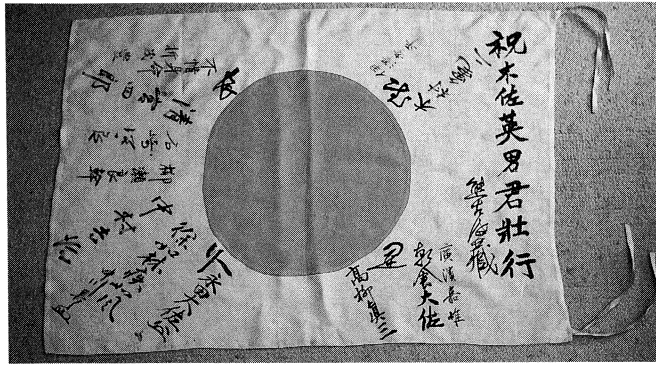
いた学徒も軍事教練は受けており、いざとなれば出征するのは当

然と考えられていた。不満はあつても、みなあきらめの境地というのが正直なところだった。一人、出征を拒否して逃げ出した学生がいたようだが、完全な戦時体制下で、逃げるところなどなかったはずだ。

仙台市内でも食料事情は悪化する一方だった。皮肉にも果樹農家では働き手を兵隊に取られて収穫できず、店に出すにも流通が滞つていた。そうした話を聞き、学友と数人で東北線の三、四駅先にある農家へ梨を食べに行ったこともある。

第二学年生の時、大学生の徴兵猶子打ち切りが発表された。十一月のある日、学内放送で呼び出され、何かと指定された部屋へ行くと、机の上に二、三枚の日章旗が置いてあった。学徒出陣する者は数百人いたが、旗をもらったのは五人くらいだったと思う。なぜ自分が選ばれたのか、大学から説明もなく聞きもしなかった。寄せ書きに軍事教練の教官だった大学配属の陸軍大佐の名前もあるところを見ると、大佐が寄せ書きの日章旗を贈ることを発案し、大学側に教練で目についた学生数名を推薦したのかも知れない。

ありがたいとは思つたものの、



驚きはしなかった。日の丸はふつう染め抜きだがこれはミシンで縫いつけてある。武運長久を祈る「千人針」に準じたのだろうか。

陸軍を希望していたのに、なぜか海軍とされた。海軍では筆記試験と面接で配属が決められた。試験は数学と書き取りなどであり難しくはなかった。前線に行かなくて済みそうな主計科を志望した。倍率が高くむりだと思ったが、幸い通った。

昭和十九年二月に東京・品川の海軍經理学校へ入学し、同年九月

に卒業した。長崎県佐世保から船で台湾へ行くことになり、途中国鉄で郷里の島根県へ寄って一泊し、一人暮らしの養母にお別れした。庭先で軍刀を素振りしながら、いよいよ故郷もこれで見納めだなと思ったことを覚えている。

日章旗は、行李に入れて持ち歩いた。台湾では主計科分隊の主計副官付き主計少尉として庶務を担当した。復葉の米爆撃機が高射砲の効かない超低空を飛んでくる空襲があり、人馬殺傷用の爆片が恐ろしかった。重要文書を持って防空壕に避難するのが副官部員の任務だった。

日米両軍が硫黄島で激戦に突入する直前の昭和二十年二月十五日、台湾ではすでに油もなく航空機の練習ができず解隊となった。残務整理をしたあと、三月下旬鹿児島県の鹿屋にあった九州海軍航空部隊鹿児島南司令部へ転属されることになった。米海兵隊が沖繩上陸作戦を敢行する数日前のことだ。台湾から数人の同僚と輸送機に乗り込み、まず上海へ飛んだ。上官から「敵の戦闘機に見つかればおだぶつだ」と言われた。敵機を避け雲の上を飛んだので、機内は爪も痛くなるほど気温が下がった。上海に無事着陸すると、今度

は一転、暑さに参った。

終戦は、鹿児島県の出水にあった特別攻撃隊基地で迎えた。航空機に爆弾を積んで敵艦に体当たりする特攻隊員と主計将校との接触はほとんどなかったが、一度、五機が飛び立つのを見送ったことがある。寺のわきに掘った横穴が事務室だった。八月十五日は部隊の各班に食料を分配する作業の指揮官をしていた。立ち寄ったある民家で、「基地に帰ってこいと電話がありました」と言われた。事務室へ帰ると、同僚が寺の庭で書類を焼いていた。まさかの時には、焼却処分するよう指令が出ていた。玉音放送を聞いた同僚らは「はつきりしないが、負けたらしい」と語った。これで助かったなどとは感じなかった。覚悟はしていた

## 入学が遅れたことの思い出

大道寺 小三郎

から「なんとたることか」との思いだった。腹立ちまぎれに軍刀で庭の竹に切りつけた下士官もいた。

九月一日付で中尉となった。残務処理のあと十二月に復学した。日章旗について特に教授にお礼を言ったり、学友と話題にしたりした記憶はない。ただ、こうした日章旗をもらったという学生は周囲にはいなかった。

日章旗が、戦後半世紀を過ぎた今、関心を集めるとは思わなかった。たくさんの学友、戦友が亡くなった。いまわしい戦争だった。

(昭21年卒)

※本稿は木佐英男氏の次男の木佐芳男氏（ジャーナリスト）が、本人より聞き取り執筆、寄稿されたものです……事務局

の後、勉強もろくにしない僕も、一年から二年への進級試験の時は落第することなく無事進級したが、これは戦時中のことでクラス全員が自動的に進級したので僕も進級した訳である。

戦後、つまり二年生の夏敗戦を

迎えたのだが、丁度動員先の日立製作所が六月の艦砲射撃、七月の大空襲で廃虚となり、動員先が青森県の大湊海軍工場に変更になった。日立から出発し、青森市に乗り換えの為に降りた途端、例の玉音放送を青森駅前の焼け野原にボツンと焼け残ったポリボックスに持ち込まれたラジオで聞いたのである。

たしか、九月の中頃から学校が再開されたと思うが、僕は戦時中文部省一辺倒で、軍国主義に燃えた教授連中が、俄にアメリカデモクラシーに化身したのを見て、心安からず弘高自治会を呼びかけて作り上げ、初代委員長を務めた。そうして、第一に無能教授の追放を標語として、最初のターゲットを校長に定めストライキの結果、到頭彼を追い出して以来専ら自治会運動に専念し、特に無能教授追放を叫んだものだから、教授陣は恐れをなすとともに激しく僕を恨み、学年末のドッペリ会議では何びとも僕をサポートしてくれる人間はおらず、二年から三年に進級する際はあえなく落第した。当時、僕は理科乙類だったけれど、大変おおらかな時代で落第したクラスでは自治会委員長でもあり、大分年を食って僕を選挙の結果、級

長に推薦してくれた。全く落第ということに関しては、軽蔑するという気持ちがあるからありがたかったが、級長という仕事は学校行政の下請けみたいなところもあるのと、担任の教授が、「何とか君、これは降りてくれないか」というお願いも受けたので、やめることにした。ともあれ、更に一年経って、二年から三年への進級時期が再びやってきたのであるが、今度もまた全く勉強もしていないし、殆どの授業を代返で済ませていた関係もあり、当時の規則で同一学年を二年はいいが三年は滞在できないという決まりがあったので、『これはいよいよ放校になる可能性がある』と思い、勉強しなくても落第はしないと言われた文科に転科した。

当時、全学連が結成され東京で第一回全国学生大会が行われたが、僕は弘高の代表者として出席した。全国約百校の学校代表のうち、共産党或いはほぼそれに近い左翼でなかったのは僕一人だけであつた為に、当時の全学連委員長の東大の武井と全国ストライキの是非について激しく論戦したので覚えてる。その時、米軍機が四機会場上空に飛来して一機ずつ会

場の上をグルグル回って低空飛行した為、当時の貧弱なマイクでは中々お互いに声を通らず、マイクを持って怒鳴り合った記憶がある。僕の右腕である副委員長は二人いて両方とも共産党であつたから、いろいろと学校で校長等ともめ事がある時は、「それじゃ、いいんですね。僕が委員長をやめて副委員長の〇〇にポストを譲ります。よろしいんでしょうね。」と言うと、「それは困る。それだけはやめてくれ。」ということで大抵僕の主張が通つた状況であつた。

昭和二十四年三月、僕は東北大学の法学部に入った訳であるが、

## 同窓会ネットワーク・「萩偲会」

川橋 幸子

僕が高等学校を卒業した途端、〇〇は副委員長から委員長となり、いわゆる関戸事件という事件が起きて弘高は全面ストに入り、三月・四月とストは長期化しニュー・ヨークタイムスにも載るような大ストライキとなった。それで、僕はそのストライキを潰すために約一カ月程大学の門をくぐるのが遅れて、五月の中頃仙台に到着したように記憶している。もっとも、大学の門をくぐるといっても教室に通い始めたのではなく、大学本部の一隅にあつた大学新聞部に通い始めたのである。

(昭27年卒・みちのく銀行会長)

昭和36年つまり一九六一年の卒業ということ、三神峯の教養部を知っている最後の学年ではないかと思ひます。二年の時に教養部は川内へ移転となりました。

三神峯の桜を皆さんは覚えてるでしょうか。五月に入ってから咲く遅咲きの桜で、名前はわからないのですが、花の色形も様々で、それまで「そめいよしの」しか知らなかった私にはとても新鮮に見

えました。また、三神峯から八木山へ抜ける山道がちょうどほどよい一時間程度の散歩コースになっていて、芽吹いたばかりの若葉とひっそりと咲く山桜が入り交る早春の頃は、それは美しかったと思ひます。今はもうこの辺りは住宅で埋め尽くされているのでしょ

うが……。  
少人数の仏法講読を担当して下さった外尾健一先生が「誰がアベ

ックで（当時はデートとは言いませんでした）その道を通ったのかすぐにわかる」とおっしゃってました。先生のご自宅は八木山の下にありました。妙なことが記憶に残っているものです。

その仏法グループの人達が中心になり、また在仙の方々が幹事になって、36年卒の同期会「萩偲会」が運営されています。50代になった頃からでしょうか、幹事さんのご苦労によりかなりひんぱんに開催されるようになりました。卒業後30周年を祝った秋保温泉での第一回総会はとても盛会でした。それからまたたく間に5年が過ぎ、同じ秋保温泉で第二回総会がもたれましたが、その時の様子も、在仙幹事の及川行翁さんが本会報第24号で紹介しているように、楽しくかつ有意義であったようです。「ようです」というのは、残念ながらその時私は欠席でした。

96年秋のその時期、私は立ち上がったばかりの新党「民主党」に参加し、初めて迎える衆議院選挙を控えて大忙しでした。政治・政党というウサンくさいことと思

われる昨今ですが、中には私のようなウブな議員もいて、理念・政策を呈示して市民の選択を求められないか。真の「政党政治」がこ



筆者（写真中央）の出版記念パーティで、萩偲会（36卒）の仲間たちと。

の日本に根付かないものかと、汗をかいている人間がいるわけです。今年四月には、さらに拡大「民主党」へと政界再編が進みましたが、仲々理屈どおりには動かないのが政治です。

6年前に私が参議院議員に初当選した時、萩偲会の在京メンバーの友人たちが「お金も票もないが精神的なサポートはできるから」と、勉強会を作ってくれました。会の名前は「あやめ会」。私の誕生日にちなんで命名してくれまし

た。そのチューター役を先輩の樋口陽一先生が引き受けて下さり、じ来6年間も継続しています。

会報を見ていると、樋口先生は36年卒組のみならずもつと後輩の年次の方々のチューター役もやっておられるようです。学者としての先生が、教育者として「社会貢献」を実践しておられ、本当に頭が下がります。

今年五月私は拙著「政党政治に未来はあるか」をまとめ、その出版記念パーティに、ふる里の新潟の幼なじみやお世話になった古巣労働省の仲間たち、加えて東北大法学部同窓会の知人・友人の皆様へ声をかけさせていただきました。

その際嬉しいことに、またもや萩偲会の仲間たちが駆けつけてくれました。議員とは個人ブレイの世界で孤独を感じることもありま

すが、こんな時は幸せを感じ勇気も湧いてきます。またOG会である芝蘭会のリーダー松嶋由紀子先生や、その世話役39Jの早坂禧子さんらが、何くれとなく力を貸してくれました。札幌での単身赴任をこの四月に終えられた厚谷襄児先生もご出席。会場の中では、東北大法学部同窓会のなごやかな交歓風景が見られました。

ところで紹介した芝蘭会の名前は、旧帝国大学時代に女性に門戸を開いてくれた東北大の歴史、伝統を記念するために、当時の文部省とのやりとりの経緯を踏まえて命名されたもの、ということですが、同窓会。それを今風の言い方でいうと「ネットワーク」による個人の「エンパワーメント」ではないかと、私は思います。本当にありがとうございます。

（昭36年卒・参議院議員）

## 「若き日の友情と感激のために」

### ——中善先生に甘えた学生達の思い出——

堀口 正明

身分法学の父といわれた中川善

之助先生が、上野駅頭に倒れ逝去されて以来二十三年。今でも先生の教えが活きておられる。

第一小話 中善並木

昨年八月、夏期休暇の一日を家族と仙台で過ごした。新幹線を降

りたつてレンタカーをまっすぐに東北大学青葉・川内キャンパスに向けた。目標は、「中善並木」とその記念碑である。桜並木は葉一杯に茂り、休み中のキャンパスは静かな中にも、若い息吹が満杯の風情であった。桜並木は立派にもう成木から老木という感じであった。

昭和三十五年（一九六〇年）、第一次安保闘争前の不穏な空気の中、東北大学法学部に全国からの学生百五十名が入学（35Jと称す）。まずは、川内キャンパスに教養課程を受講。当時の川内は、まだ、進駐軍のカマボコ兵舎が芝生の中に点在、学生は自転車に下駄履き、授業の合間には芝生で歓談といったのどかな風景が見られた。

その年の教養部運動会、仮装行列などから、まとまりを見せていた35Jが、秋の大学祭に「焼き鳥屋」を出店したいと、実行委員会に提案。今でこそ、大学祭と言えば、食べ物屋オンパレードといったところだが、当時ではかかる発想なく、アカデミックな大学祭に不適とされ、困った我々は中川先生に助けを求め、あの北向きの部屋（研究室）に押し掛けた。学生を愛される先生は、我々の提案を支持し、ここに焼き鳥屋「法一亭」

が実現。亭主は三原一正君（現在弁護士）、「たれ」は我々馴染みの文化横町の「きむら」仕込み、衛生にはことのほか気を付け、許可関係と共に、学食の片平食堂（一番丁寄り）で事前にネタ煮込みなど。高校出たての、台所など入ったことのない連中が豚の内臓など水洗い、釜で煮炊きでその苦労は大変だった。小生は会計担当、テント小屋の「法一亭」は盛況。中川先生も来店、ストーム（肩を組み輪を作り凱歌を歌う）の洗礼を受けられた。

三日間の焼き鳥屋の収益が、一万五千円、当時では大金である。早速、クラス会に掛けたところ、35Jの旗と植樹に充てようとした。この植樹が「中善並木」の起源である。中川先生から「若き日の友情と感激のために」とのお言葉をいただき、青葉山から採取した石碑に刻み、「中善並木」と命名。命名式には、裸踊りやブラスパンドなど馬鹿騒ぎをしたが、先生はやさしい目で我々を受け入れていただいた。最初は櫛（けやき）を植えたがうまく行かず、場所、植え替え問題など卒業後も課題は残った。事務局、諸先輩、特に林屋礼二先生には特段ご支援いただき、現在の並木が実現した。

我々35Jの仲間はこの青春の友情・感激を、中善並木に凝縮した気がします。後記する有志による仙台―東京徒歩旅行、クラス雑誌「暁光」を編集したり（これは残念ながら創刊号だけでしたが）、三年次では、大学祭での法学部定番「模擬裁判」（「生命の価格」として、交通事故の賠償を取り上げました）、法律相談所にも積極的に参加。文字通り、中善先生の「若き日の友情と感激」を、東北仙台の地で学びました。

先生の思い出を「法学セミナー／中川善之助・人と学問／昭和五十一年四月臨時増刊」に見ると、先生が学生を愛し、東北大学を愛したことがあらためて思い出されます。

## 第二小話 中善はぎの会

四月十二日(日)、北鎌倉駅に「中善はぎの会」のメンバーが集合、当日は林屋先生を筆頭に十六名参加、恒例通り、東慶寺の中川先生ご夫妻のお墓にお参りし、近くの「好々亭」で昼食を共にしての語らいの時を持った次第。

「中善はぎの会」については、本会報にて紹介されているが、前記小話の中善並木を起点として、東京まで徒歩旅行を行った東北大

法学部のメンバーとこれを支援していただいた林屋先生（会長）が昭和三十六年（中川先生が東北大を退官された年）、小生も参加した法学部有志八名、常磐道を南下、十一日間、公民館、学校、教会などに宿泊、東京の中川先生宅がゴールの三百九十キロの徒歩旅行でした。その後、毎年、東北道、常磐道を交互に徒歩旅行は続けられました。

これらの学生を迎える、中川先生宅では、奥様も含め大変なご迷惑を掛けたことと思います。しかし、奥様のご葬儀の際、ご遺族からは非にと徒歩旅行代表者の弔辞が欲しいと依頼を受け、第二回参加の芳賀正紀君（36J、現在原子燃料工業勤務）が突然の話ながら弔辞を述べさせていただいたとの話を伺うと、先生ご家族にとってかなりご印象が強かったのでしょう。

しかし、交通量の多い国道に沿っての徒歩旅行は危険でもあり、中川先生が心配され、第八回（昭和四十三年（一九六八年））をもって終了としました。参加総数八十五名でした。この徒歩旅行は、東北大を去られた中川先生を慕っての東北大法学部学生の師弟愛のシンボルといった報道がされ



ましたが、第1回の我々は、当時マラソンなどして、それが高じて東京まで、いやそれなら先生宅だといった他愛のないものでした。もちろん、先生には、すれ違いで講義を受けられなかった我々が先生に甘えたいとの意識があったことは事実だったと思います。歩いている時は東京へとの一途な思考停止の状況でしたが、千住大橋で先生がお孫さん連れて迎えに来ていただいた時はヘナヘナとなっていました。当時の人気TV番組「私の秘密」に登場したり、雑誌「旅」（一九六一年十月）に三原君寄稿と思いが蘇ります。

徒歩旅行の同志の会を開こうとの声を受け、七年前から毎年四月第二日曜日と定めて会合をもっています。最後の第八回徒歩旅行から数えても既に三十年が経っています。「若き日の友情と感激」の中善並木碑を起点とした若き学徒も既に五十才の大台。来年の記念すべき第八回中善はぎの会は、中善並木の花見をして秋保温泉でと衆議一決して、今年の会は、解散しました。参加者に一言と色紙を回したら、「若き日の友情と感激のために」と的林屋先生の題字につられて、以下。若い方から紹介。

「仙台ー東京、三日目のマメの痛みは何物にも代え難い思い出」……飛田（第八回）

「耐えて歩き通して、苦しみが突然消えてなくなる経験は忘れられない」……穴戸（第七回）

「春草の夢」……木下（第七回）

「天行健也の言葉、林屋先生のアイヌ等が思い出されます」……川口（第六回）

「皆髪が黒かった」……新倉（第四回）

「バカなことをし、人のお世話をし、感激し、酒を飲む、これぞ本懐」……宇野（第四回）

「遠く若い日の想い出が今一番記憶に新しい」……久間木（第三回）

「東京に入ってからが一番辛かった。それが、中川先生のお宅で全て消え、幸せでした」……池ノ上（第三回）

「情熱は永遠である」……高野（第二回）

「苦あれば楽あり」……阿部（第二回）（今回、奥さん同伴）

「アングロ・サクソンに勝つ日本を願っている」……芳賀（第二回）

「反骨精神」……堀口（第一回）

「無知性の知」中善の言葉です……三原（第一回）

「若き日の友情と感激のため

に」は、先生のお言葉ですが、東北大に学ぶ、いや青春を走る（走った）若人すべてに捧げられる言

## 同窓会本部・宮城支部だより

事務局長 小野寺 健三郎

◎平成9年度通常総会・宮城支部総会、懇親会

平成9年度の総会は、11月28日午後6時35分からホテルリッチ仙台・蔵王の間に於いて、八島淳一郎理事（事務局長補佐）の司会進行のもと開催された。前例にならない宮城支部総会・懇親会共催でありましたので、宮城支部だよりを兼ねてその模様をお伝え致します。

まず、柳父圀近会長（法学部長）よりご挨拶を戴いた。会長は明間輝行宮城支部長が勲一等瑞宝章を授与される栄誉に浴され、また阿部純二名誉教授も藍綬褒賞受賞の栄誉に浴されたことにそれぞれ祝意を表し、次に昨今の社会経済情勢の激変で、当同窓生の中でも大変ご苦労なされている会員もおられる状況であり、何とか頑張つて欲しいと切に願っていること、さらに母校法学部では、藤田宙靖教授が政府の行政改革会議委員としてご活躍、また小山貞夫教授が学長特

葉ではないでしょうか。

平成十年五月  
（昭39年卒・榎東芝）

別補佐、関俊彦教授が学生部長としてそれぞれご重責を担われ片平の本部でもお仕事をされていること等をお話しされた。

次いで明間支部長が公務出張のため欠席につき、田畑精治副支部長が挨拶に立ち、出席会員の顔触れをみると、今後は支部会員同士が仕事上でお互いに役に立つ道が無いかを模索してみることが必要なのでは等と話された。

ご来賓は阿部純二名誉教授、藤田宙靖教授、吉田正志教授。来賓祝辞は藤田先生より戴いた。先生は、行政改革にかかる中間報告（案）は満身創痍の感もあるが、自分なりによく仕上がったのではないかと思っていること、自分が行革委員に任じられたことで、前学長の西沢先生よりは、東北大学の名声を高めてくれたと手放してお褒めを戴いたが、学長と学部長の間柄のときは何かと意見を異にして、議論することの方が多かったことを思うと些か心中複雑な



のがある等お話しされ、満場の笑いを誘われた。  
 議事に入り、柳父会長が議長となり、次の通り進められた。  
 I、会務報告  
 事務局長より、飯塚理事よりの大口寄付金の課税問題とのからみで、理事会の承認を得て急遽《東北大学法学部同窓会学術振興基



金》の設立をし、この基金に改めて飯塚理事より寄付願うことにしたこと、この基金の構想は、平成4年の理事会で概括承認を得たが、その後の経済情勢の激変等により実行を見送っていたものであること等を報告した。尚詳しい説明は、平成十一年度の総会の承認

を得て行方予定の会員宛の寄付要請の際に行います。

I、平成8年度決算報告

事務局長説明、上田宏監事の監査報告の後、承認された。

説明概要は以下の通り。収入合計六、五六八千円、支出合計、五、五〇七千円、総括して当年度は名簿を発行しない年でもあり、一、〇六一千円の収入超。次期繰越金六五、三四一十千円(内、飯塚理事より寄付預かり金五〇、〇〇〇千円)。

以上にて総会を終わり、前支部長の津軽芳三郎理事の乾杯のご発声により懇親会がスタートした。宴たけなわの頃、青森より出席された大道寺小三郎会員(S27年卒)に「ひと言」とお願いしたところ、講義にはあまり出ず新聞部室にたむろしている時間が多く、その意味ではあまり真面目とは言えない学生生活であったが、いろいろ得るものがあつた数年間であつた等、学生時代を振り返って話された。

名残尽きない懇親の会も9時ち

東北大学全学同窓会・後援会報告

東北大学の教育・研究への援助

よつと前に、東海林恒英副支部長の閉会を告げる挨拶でお開きとなつた。

◎同窓会会議等の予定

理事会

9月26日(土)正午

於法学部大会議室

同窓会通常総会・懇親会

東京支部会総会・懇親会 共催

11月6日(金)午後6時

於学士会館(東京神田)

宮城支部総会・懇親会

11月13日(金)午後6時30分

於仙台国際ホテル

福島支部総会・懇親会

11月13日(金)午後6時

於福島・杉妻会館

◎前年度会報(24号)の一部校正の誤りのお詫びと訂正

9頁最下欄《それはまさに「地獄」以外の何物でもなかった》中、「何物」は「何もの」が正しい。筆者の諸橋 奏氏に深くお詫び申し上げます。

以上

阿部 純 二

・助成を目的として、全学同窓会

を母体とした後援会が設立されて  
早や五年目となりました。平成九  
年度の活動報告とあわせて御寄付  
のお願いをさせていただきます。

後援会の事業として、第一に昨  
年度に引続き、本学と大学間の協  
定を結んでいる外国大学に短期留  
学した一一名の学生に奨励賞を授  
与しました。

第二に、後援会の助成により平  
成八年一月に設立された東北大  
学出版会に対し、基盤安定に向け  
ての資金を助成しました。出版会  
の活動については、会報「宙（お  
おぞら）」等によってご承知の方  
も多いと存じますが、平成九年度  
は西村貞二「歴史学の遠近」など  
七点を刊行し、次第に学術書出版  
社として注目を集めつつありま  
す。

第三に、一月一五日に全学同  
窓会との共催で記念講演会並びに  
懇親パーティが開催されました  
（会場・勝山館）。講演会では、  
元京都府立大教授、寿岳章子先生  
の情味あふるる「我が心の内なる  
仙台」と阿部博之総長の気宇壮大  
な「これからの日本と東北大学」  
という二つのお話をうかがい、聴  
衆一同、過去と未来の東北大学の  
姿に思いを馳せたことでした。

後援会は、東北大学創立九〇周

年にあたる平成九年度に財団法人  
となるべく募金活動を続けてきた  
ところですが、平成九年度にはこ  
れまでの寄付額のうち一億三千万  
円を法人設立基金の一部とし、な  
お必要な一億七千万円の目標を達  
成するため、同窓生の皆様方にも  
募金をお願いしたところでありま  
した。

その結果、法学部同窓生の皆様  
にも相当額のご応募をいただき、  
深く感謝しております。

しかしながら、全体としての平  
成九年度末現在の応募額は四、四  
一一名一〇六、八八九、九一六円  
となっており、目標額一億七千万  
円にはまだ不足しております。そ  
こで、平成一〇年度には、何とし  
ても財団法人化を実現すべく、未  
応募の同窓生の皆様方に再度のお  
願いをすることとなりました。す  
でにそのお願いが参っているかと  
存じますが、同窓生の皆様方の一  
層の母校愛あふるる御協力を重ね  
てお願い申し上げます。

（昭30年卒・東北学院大学法学部  
教授・東北大学名誉教授）



# 支部だより

## 東京支部会

荒木幹仁

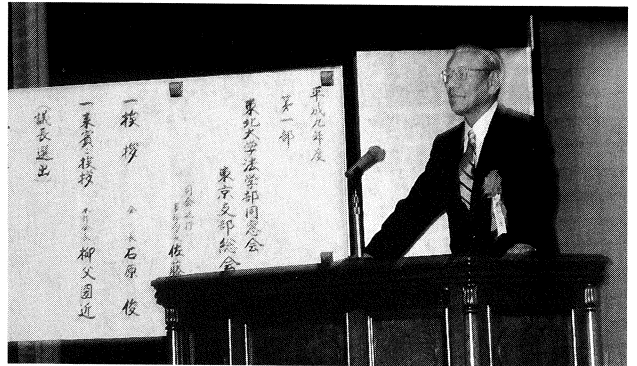
平成九年度の支部総会は、昨年  
と同じ日の十一月七日(木)に学士会  
館において開催されました。

当年は、支部単独の開催でした  
が、来賓として本部からは同窓会  
会長の柳父圀近法学部長のほか大  
内孝助教授、小野寺健三郎同窓会  
事務局長をお迎えし、東京支部会  
員一一〇余名が参加し、盛大に開  
催することができました。

支部総会は、佐藤正之事務局次  
長（昭32年卒）の司会で進められ  
ました。

式次第に従って、最初に石原俊  
東京支部会長（昭12年卒）が挨拶  
を行った後議長を務められ、庄司  
晃明事務局長（昭25年卒）の会務  
報告、野口久隆理事（昭53年卒）  
の会計報告および監査報告が拍手  
で承認され、議事を終了致しまし  
た。

引き続きの講演には、朝の人  
気番組であるニッポン放送「お早  
う！中年探偵団」のパーソナリテ  
ィの高嶋秀武氏を講師にお迎えし  
て「おしゃべりで人生を楽しく！」



と言うテーマでお話を頂きました。  
た。

会員各氏が高齢社会で楽しく過  
ごすには、過去の肩書を忘れて、  
常に柔らかい頭で新しい情報を積  
極的に取り入れながら、豊かな話  
題を次々に発信していく必要があ  
るとのことでした。

ともあれ、ユーモアあふれるお  
話ぶりに笑い声が何度もわき起こ  
り、また、教訓に富んだ話題に頷  
く会員の姿も散見され、アツと言  
う間に時間が過ぎました。

講演後の懇親会は、私（荒木、  
昭37年卒）が本年も司会進行を仰

せつかりました。乾杯の音頭は、進行役の独断により石原俊東京支部会会長（昭14年卒）にお願い致し、開宴となりました。

本部から出席された柳父同窓会長、大内助教、小野寺事務局長を改めて出席者に紹介し、各氏からスピーチを頂きました。

例年の事ですが、みちのくゆかりのBGMの流れる中、一年振りに旧交を温め合う会員も多く、懇親会は最初から大いに盛り上がりました。

この懇親会には、講演で熱演された高嶋秀武氏にも出席して頂いたところ、同氏のまわりには入れ代わり、立ちかわり会員各氏が集まって談笑の輪ができ、大変和やかで、楽しい雰囲気の中に時間が過ぎて行きました。

そして、定刻をやや過ぎたところで、坪井賢司事務局次長（昭31年卒）の力強い万歳三唱の発声に全員が唱和し、名残を惜しみつつ次回の再会、そして互いの健康を祈念しながらの散会となりました。

### 北海道支部総会

斎藤 哲也

北海道支部の総会は例年、二月

頃に開催されており、今年も平成十年二月二十五日(水)に札幌市中央区のすみれホテルで午後六時から盛大に行われました。

当日は役員改選の件、会計決算の件が計られて、平成二年以来副支部長として活躍された小納正次氏（昭和十六年卒）が勇退され、安井吉典氏（昭十五年卒）とともに顧問に就任、後任の副支部長には安念正義氏（昭和二十九年卒）が選任されました。また、理事の一部を改選する案については、理事会に一任されて、後日決定される運びとなりました。また、会計決算では積立金残高が約十万円にまで落ち込み、揃々寄付金を考慮する時期がきたのかとも思われます。

さて、総会後の懇親会には総勢四十四名が出席、千葉からも参議院議員佐藤道夫特別会員（昭和三十年卒）が参加されて、国会近況報告がありました。

今回は久しぶりで顔を見せた泰正美氏（昭二十八年卒）、斎藤昭三朗氏（同二十八年卒）、笠井真一氏（昭三十六年卒）などの先輩に交じって、若手で弁護士を開業された近藤明日子さん（昭六十年卒）、磯田丈弘氏（昭六十三年卒）が初出席、さらに、清水一男氏（昭

四十一年卒、中小公庫札幌支店長）、堀江靖人氏（昭四十二年卒、大成建設札幌支店部長）、笠井善之氏（平四年卒JR北海道）の皆さんも初出席でした。

当日は暖冬の夜となり、五つの宴席を囲んで、交流の輪が深まり詩吟、演歌なども飛び出して和やかなひとときを過ごしました。また、長年当支部の運営に協力下さった厚谷襄児会員（昭三十二年卒・北大教授）が今年三月に定年を迎え、この夜を最後に帰京されました。拓銀の破綻で再就職に苦労されておられる会員諸氏も、一日も早く新たな職場を得て、この会に出席できますよう、心待ちにしております。

### 岩手支部の近況

廣田 淳

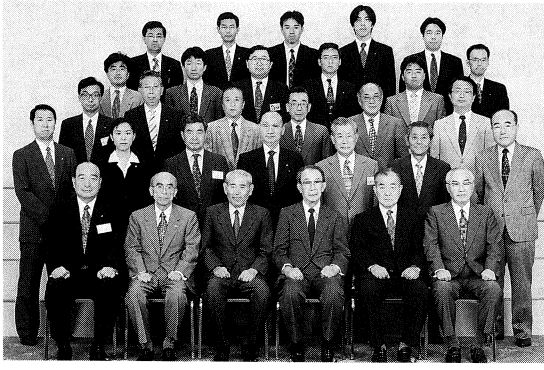
岩手支部は、総勢百二十名で構成されており、行政・教育関係、地元金融機関、法曹関係のほか、最近では、各民間企業の盛岡支店に勤務となった方々も増え、多士済々の状況となっております。

総会は、毎年七月に欠かすことなく開催されており、平成九年度は昨年七月十日に盛岡市内のホテルニューカーリナで開催されまし

た。出席者は三十三名となり、支部長でもある石井富士雄氏（昭和十八年卒）を筆頭に、平成九年卒まで満遍ない出席をいただきました。

恒例となりました出席者全員による記念撮影をおこない、懇親会となりましたが、卒業年次の古い順に一人ひとり、最近の生活ぶり、仕事ぶり等を話していただき、楽しい夜はまたたく間に過ぎていきました。

様々な話に花が咲いたところではありますが、一年に一回の再会を心待ちにしている出席者も多く、年齢の重ねた世代では、お互いの



健康や毎日の生活ぶりに、若手の連中はそれぞれの仕事の情報交換が話題となり、宴は大変盛り上がり、過ぎ行く時間も忘れる晩でありました。

年一回の総会ではありますが、年代を越えて固く結ばれた絆は益々強いものとなり、会員各位にとっては、公私にわたって多くの収穫となっているものと確信しております。

総会の最後に、当支部の益々の発展と会員各位の健勝を祈念して、再会を誓ったところであります。

(昭五十年卒・岩手支部事務局)

## 支部の近況

星野 清

本支部は、昭和四十二年に発足してから、今年で三十二年目を迎えます。

会員数は発足当時の六四名から平成九年十一月現在で二二二名と毎年増加を続けております。

以下、支部の近況をお伝えします。

### ①平成九年度支部総会

支部総会はこの数年、毎年十一月開催が恒例となっており、平成九年度は、十一月十四日に二十五



名の会員出席により、福島市内の杉妻会館で開催いたしました。総会では、佐藤支部長の挨拶の後、ご来賓の渋谷助教授より大学の近況などについてお話をいただきました。

### ②福島県の近況

平成九年十月一日にいわき市と新潟市とを結ぶ磐越自動車道が開通しました。これは、日本で初めて一本の高速道路で太平洋側から日本海までに達する本格的な国土

横断道路の登場であります。

さらに平成十年四月には、北関東・東北の太平洋岸を縦貫し東京から仙台に至る常磐自動車道の未開通区間のうち、福島県富岡町と相馬市間、宮城県山元町と巨理町間について、これまでの計画段階から施行段階に移行する施行命令も出されています。

このように、福島県は交通網の整備が進み、また工業立地は全国有数の伸びを示すなど、着実な成長を続けております。

### ③支部の活動

当支部の事業は、毎年の支部会員名簿の作成及び会員への配布、年一回の総会の開催であります。

しかしながら、県内在住の法学部卒業生を事務局が把握できる範囲で名簿に掲載するだけで、所在確認は会員の好意に頼らざるを得ないため、全員を掌握することは難しいのが現状であります。

平成九年度も名簿や総会通知が届かなかった方もあるかと思われ、この場を借りてお詫び申し上げます。

また、平成九年度は、支部総会への平成の卒業生が四名と、若い世代の参加が少なく、参加者も固定していく傾向になりつつあると感じられます。

さらに、会員の過半数を県職員が占めていることから、支部運営がどうしても県職員中心になりがちであります。貴重な情報交換の場である総会へは、民間企業に勤務されている方々にも多数参加していただきたいと考えており、今後は、総会を中心とした支部活動の在り方について、広く支部会員の皆様から意見をいただきながら、活動を進めていきたいと考えております。

なお、名簿に掲載されていない、又は異動のある県内の卒業生の所在について、また支部の事業についてのご意見など、なんでも結構ですので、ご連絡をお待ちしております。

最後に、名簿作成ほか総会開催にあたりお世話になった同窓会本部の皆様、当日ご多忙にもかかわらずご出席いただいた渋谷先生並びに会員の皆様に御礼を申し上げます。支部の近況報告と致します。連絡先 福島県庁道路建設課

星野 電話 ○二四一五二一―七四四八 (平四年卒・支部事務局担当)

## 東海支部同窓会報

松 田 太 源

平成十年四月二三日、午後六時

から、毎年同窓会ではお世話になつている鳥久に於いて、東北大学法学部東海支部同窓会が盛大に開催された。

今年は、北村利弥先輩（昭九年卒）、中山俊一先輩（昭九年卒）を筆頭に二六名の出席者を得て、さらに、経済学部卒業生の佐々木仁先輩（昭二八年卒）、鈴木紀先輩（昭三七年卒）兩名にも出席して頂き、総勢二八名の出席者を得た。ただ、当初の出席予定者のうち四名が欠席となつたのが残念であつた。

そして、今年は、平成以降の卒業生が六名も参加し、ここ数年若手の参加者が定着しつつあり、幹事としては嬉しい限りである。

さて、総会は、北村先輩の挨拶に始まり、進藤裕史幹事（昭五八年卒）から会計報告が行われた後、中山先輩の御発声で乾杯し懇親会となつた。

出席者の方々は、一年ぶりに会う方も多く、懇親会が始まつた途端、あちらこちらのテーブルから談笑が聞こえ、その上、中には懇親会がもう二次会という方もおり、最初から大いに盛り上がった。ところで、今年は素晴らしい余興があつた。何と、北村先輩が、右に持ったティッシュペーパーに

火を着け、その燃えているティッシュペーパーを両手でもみ消したかと思つた途端、その両手から千円札が出てきたのである。北村先輩はその後、種明かしをされていたようであつたが、みんなお酒もかなり入つており、どこまで分かつたのかは不明である。

そして、さらに、旗進先輩（昭三一年）が歌う黒田節に合わせ、北村先輩が舞を披露されるなど、北村先輩がとても現在八？歳とは見えない程お若く元氣であつた。

その後は、経済学部卒の佐々木先輩が挨拶をされ、最後は、毎年恒例となつてしまつたようであるが「青葉もゆる」、「明善寮寮歌」を全員で大合唱し、八島行康先輩（昭一八年卒）の音頭で万歳三唱して、平成一〇年度の同窓会はお開きとなつた。私を含め元氣な若手同窓生は、旗先輩に連れられ、雨降りの中、二次会へと向かつた。

大先輩の中には、普段、自分の周囲には同年代の人間しかいなくて、同窓会に出て若い人と話をするのが楽しいからこの同窓会には毎年出席するという方もいて、この同窓会というのも大きな役割を果たしていると感じた次第である。今年、例年より若手の初参加者が多かつたと思う。やはりこれ

まで参加していた方から誘われて参加するということが多く、来年も出席される方で、同窓の知人がいれば、できるだけ声を掛けお誘い合わせの上、一緒に参加していただけたらと思います。  
（平四年卒・幹事）

## 大阪支部だより

大 錦 義 昭

春まだ浅い、二月一〇日、帝国ホテル大阪二階バイシイズの間において本部から柳父法学部長をお招きして、三〇名の出席を得て大阪支部総会が開かれました。

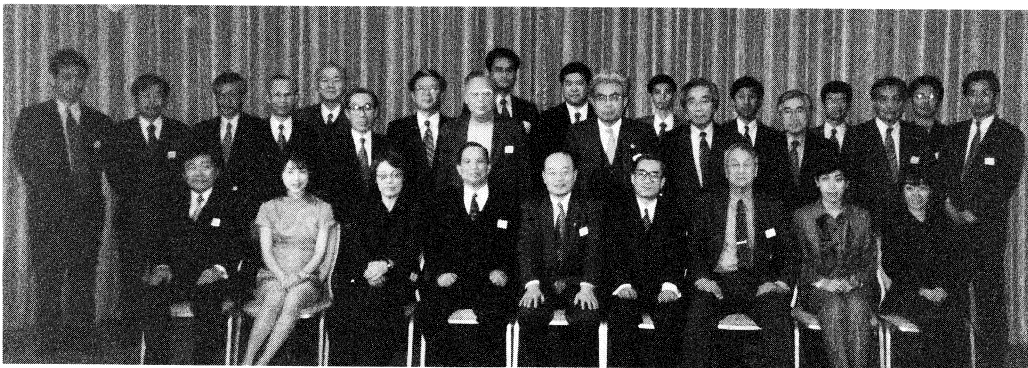
最新の同窓会名簿によると、関西地区の会員数は四八四名でしたが、案内のがきが一〇三枚未送達で返戻されたので三八一名の会員がいることになりました。

当日は、昭和二八年卒業の小林勝大先輩から平成五年卒業加藤夫妻までの四〇年の年代間隔の中で各分野で活躍されている会員が集まりました。

平尾（昭四四年卒業）、三浦（昭五八年卒業）両理事の司会の下で、支部長挨拶、本部署部長の来賓挨拶のあと、小林先輩の音頭で乾杯をして懇談に入りました。

司会者は、参加者に対し、アトランダムに指名し、結局全員が自

己紹介をすることになりました。旧制二高時代からときおこしての法学部の話、学生時代のアルバイトの想い出、松川事件差戻無罪



仙台高裁判決のときの取材エピソード、現在の職場の状況、学究としてなお意欲おとろえない話、等々個性豊かな自己紹介でしたが、いずれも東北大学法学部に対する深い愛着が感じられるものばかりでした。

なお、大阪法曹界の慶事として、昭和三十五年卒業の久保井さんが、平成一〇年度大阪弁護士会長に就任することが決まっており、参加者から盛んな拍手を受けていました。

坂根申悟（昭五六年卒業）さんは、自己紹介に代えて、エールを声高に披露し大いに盛り上がり、最後は、大学応援団長の経験者の山本敏信（昭和四四年卒業）さんの指揮により、東北大学学生歌（「青葉もゆる……」）を斉唱して閉会となりました。

（一九九八・五・一八）  
（昭三四年卒業・支部長）

## 同期会だより

### 萌木会卒業四〇周年

#### 記念大会

#### 秋保で盛大に開催

佐藤 信義

萌木会は、昭和二八年入学・昭

和三二年卒業の同期会である。昨年八月三〇日、恩師、廣中俊雄先生をお迎えして、卒業四〇年の節目を記念する全国大会が秋保温泉、ホテル岩沼屋で盛大に開催された。同伴のご夫人お二人を含めて総数五六名の参加者となった。それぞれに懐かしい思い出の土地、三神峯の自然に回帰でもするよう秋保の地に集ったともいえるよう。

なお、在仙幹事一同として残念で寂しかったことは、平成六年四月に桜の花の散るよう急逝した佐々木尚介君の名前を萌木会名簿の「逝去会員」の欄に記さなければならなかったことである。

在仙幹事（法学部同窓会の名事務局長でもあった）の中心としてこれまでの全国大会・仙台開催の企画、準備作業などに力をつくされてきたことを思うと、本会に彼の姿のないのが寂しいのである。

大会祝宴は、本多義昭君の司会進行で開会。逝去会員のありし日の元気な姿を思い起こしつつ黙祷を捧げた後、東海林恒英君が在仙幹事代表として挨拶。

廣中先生からご祝辞のお言葉を戴き、樋口陽一君の乾杯の音頭で懇親、懇談の会に移った。

揃いの浴衣で同期の友と酌みか

わす酒は、まことに美酒である。大学を出てから四〇年、髪に霜をおく友も多くなったが、ここで友の間では気持ちのうへの加齢はない。当時のままで。

からは法曹界の話題をからませたユーモアあふれるスピーチがあった。懇親会は始まりから和やかな空気の中で進められた。

スピーチとして、在京幹事代表の佐藤正之君より東京地区の会員の様子と地区懇親の状況などの話があった。在仙幹事の小林啓二君

酔うほどに肩を組み学生歌、寮歌を歌うグループもあって、懇親会の雰囲気は、「酔へる心の吾若し 吾永久に緑なる」という寮歌の歌詞そのものだった。

懇親会は、在仙幹事、伊藤義博君の手締めと女性会員三人のうち出席の岡井悠紀子さん、森嗣子さんの閉会、閉宴の辞で終了した。

幹事部屋においての二次会も賑やかであった。在仙幹事が二次会の酒のつまみとして欠かさず用意するものが二つある。仙台の味覚、長なす漬けと笹蒲鉾である。

それに、板垣義次君が持参の山形地場産品のワインもあるのだから盛り上がって自然なのである。

卒業記念雑誌「萌木」（編集者は田沼四郎君、発行者は松永勇幸、樋口陽一の二君）の巻頭言に、「師友との心のふれあいは、……そして、そういう我々の間に続くものが、単に旧交を温めることではな



く、たえず新鮮な心のつながりを再生産するような関係でありたいと願わずにはいられないのである」という言葉がある。わが苗木会は、まさしくこの願いを求めていくのである。

翌朝には五年後の再会を期して流れ解散となった。幹事側から配った仙台の街並み、思い出の場所など八枚の写真が、仙台と会員を現在に結びつけるよすがになればよいと思っている。

(昭32年卒)

## 卒業25年ぶりに 仙台に集う

和田 義則

昨年の5月24日は朝から愚図ついた天気だった。クラス会の始まる2時間前からは風混じりの雨、それもかなりの風が吹き荒れて臨時の雨傘では間に合わなかった。そんな中18時の開始前には、続々と日本各地からクラスの面々が集まってきた。25年ぶりに初めて会う顔もある。受付で見ていると、大分髪には白いものが目立ちはじめている。顔を見ると、昔の面影がはつきりとしのばれる。

入学の時を思い出す。S43年入学の面々である。43J2××のメンバーを中心に、拡大クラス会、



1組、3組、そして卒業がS47年の者もいる。集まったメンバーは28名。これまで東京のメンバーを中心に、年に2回、5月と11月に東京で、クラス会を実施してきた。

その参加者は概ね20名前後。年に1回では、都合のつかない者もいるので、自然と2回/年に落ち着いた。H9年は卒業後、25周年に当たるので、場所を仙台として、懇親会その他に、ゴルフ会も企画して欲しいとの多くの会員からの要請もあり、この日の開催となった

ものだ。まず、幹事を決めることから始まった。場所幹事は地元の鈴木(宮城県)さんに、ゴルフ幹事は斉藤(出光興産)さんと西尾(三菱地所)さんに、そして、総合幹事は飛田(沖電気工業)と和田(日産船舶)の5人体制で臨むことになった。場所は勾当台会館に決まった。翌日はオープンで泉パークタウンGCでゴルフとした。クラス会の名簿は出来るだけ完璧に作成した。S43年に入学した時のわら半紙にガリ版刷りのクラス名簿が幸運にも残っていたので、それをアップ・トゥ・デイトした。それに基づき、案内状は60名に配布した。その結果、参加者は30名と見積もった。ゴルフは3組。クラス会直前には、32名の参加が確認されたが、当日4名はやんごとなき用事が入り、結局28名となる。

まず、幹事の挨拶が始まった。次いで、会員の近況報告。28人もいるので、2分/人としても1時間かかる。この25年を2分で見やべるのだから大変だ。北は宮城県から南は大阪まで。距離的に一番遠い人は大阪の古谷(関西電力)さん、時間的に一番遠いのは林(富山県)さん。一番近い人は鈴木(宮城県)さん。2時間の宴

はあつという間に過ぎた。最後に、学生歌の合唱と「明善寮寮歌」のプログラムを高らかに吟じ、又の仙台での再会を約して、散会となった。それぞれの職場で中堅となつて働いている面々達である。いろいろの用事もあり、1次会で帰る者、2次会、3次会とはしごする者もあり、各人、久しぶりの仙台を十分に楽しんだようだ。帰りに、片平丁を訪ねた者、学生寮を訪ねた者、松島を家族と見てまわつた者等、いろいろであった。

なお、翌日のゴルフは雨のため中止になったのは残念であった。

今回の参加者28名は、菅原通孝、島田武幸、山内一正、横尾正、前田美穂、前田泰紀、関根定利、西尾真、鈴木敏明、有川博、大泉富士男、佐藤雅春、高橋孝安、堺谷操、古谷昭二三、中居康史、佐藤敏明、菅野純一、斉藤廣、菅原悦郎、杉山昇、林時彦、藤咲寛、松倉佳紀、宇野哲人、佐久間裕、小町武志、和田義則の諸君であった。年を経るたびにこの輪は段々と大きくなっていくだろう。

(昭和47卒・日産船舶)

